

おしゃべりコーナー

(目次)

< 西神の花 >

「[ビワの木](#)」

(竹の台・島田)

< 今月の歌 >

三橋美智也「[古城](#)」

(竹の台・米田)

< ショート・ショート >

「[足を運ぶ](#)」

(春日台・大西 No.22)

< 西神の花 >

「ビワの木」

街路樹なので、食べてもいいかなと 2 つ食べました(笑)。
甘くて、おいしかったです！！



(竹の台・島田)

[目次へ](#)

< 今月の歌 >

「古城」

歌：三橋美智也、作詞：高橋掬太郎、作曲：細川潤一



<https://youtu.be/5a5h-91e3eY?si=bQ-MFdqTczsXRI11>

三橋美智也の歌は、昭和30年代＝私の小中高のころ、「リンゴ村から」、「夕焼けトンビ」から、ふるさと、おふくろ、夕日などを題材にした懐かしい歌が、子供の胸を揺さぶりました。

そして日本の名曲「荒城の月」を彷彿される歌謡曲の名曲「古城」(1959年発表、300万枚)が生まれました。以後の演歌は涙、雨、港、女と退廃的に流れていきました。

♪ 松風さわぐ 丘の上
古城よひとり 何偲ぶ
栄華の夢を 胸におおい
あーあ 仰げば侘し 天守閣

♪ 崩れしままの 石垣に
哀れを誘う わくらばよ
矢玉のあとの ここかしこ
あーあ 昔を語る 大手門

♪ 蕨青く 苔むして
古城よひとり 何偲ぶ
たたずみおれば 身に染みて
あーあ 空行く雁の 声哀し

(竹の台・米田)

[目次へ](#)

<ショート・ショート> ちょっとした気づきやつぶやき・・・

「足を運ぶ」

工場勤務を始めた頃。

切断機で早朝、警報アラームが鳴り、作業が停止した。

作業者が安全カバーを作動させずに起動ボタンを押した事によるものだった。

翌日安全係が事故と同じ時刻に再確認に行くと、日の出の光が操作盤に反射し、操作ランプの色別に難があった。

連続操業のある時間に起こりえる状況は、現場に足を運ぶことでその原因が分かったのである。

今、世の中は情報に溢れている。現場に足を運ばなくても大量の情報が入ってくる。

受け入れ易い情報のみで判断を迫られているのだろうか。

足が衰えて、なかなか現場に足を運ぶことがままならぬ年齢になって、ますます「足を運ぶ」ことの大切さを感じるのである。



(春日台・大西 No.22)

[目次へ](#)